

市民の提案による「二十一世紀への横浜の街づくり」

石毛良夫
小松崎隆

一 はじめに

人類にとって、大きな世紀の区切りである西暦二〇〇一年は二十一世紀をあと二〇年後に控えた現在、われわれの構築した「都市」は、今なお幾多の難題を包含しつつ存在している。

かつてない高度経済成長を遂げた日本でも都市は急成長したが、それは準備運動をしないランナーに似ていた。走れるだけ走った後で体の不調を訴えても競技は止まらない。一九七三年のオイルショックは、しかし、この競技にストップをかけてしまった。

オイルショックは、富の追求という観点からは、確かにわれわれに打撃を与えたが、同時に貴重な反省の時間を与えはしなかったか？

専門家や住民組織の指摘した「都市問題」は、都市の成長の最中であって自家消化されたかのである。クルマ公害を唱える住民はマイカーを乗り回したし、年間一万人を超える事故死者数は人

々を驚かすこともなくなった。

七三年以来、都市問題の噴出が終息したわけではもちろんない。しかし、人々は自ら住み、働き、憩う場である「都市」のこれからのあり方について、今、立ち止まり考え始めている。「文化都市」といった一見安直な流行語でさえ、高度成長期には省みられなかったことであった。

市制九〇周年、開港一二〇周年を記念して一九七九年十一月に横浜駅西口・相鉄ジョイナスで開催された「街づくり展」(横浜市都市整備局主催)はこうした背景を踏まえ、未来の横浜の街づくりがどうあるべきかを市民に問題提起したものである。

同展では同時に、「二十一世紀を展望する横浜の街づくり」について市民アンケート調査を行った。今回はその結果報告をすると共に、若干の考察を加えるものである。

二 市民の提案による「二十一世紀への横浜の街づくり」

アンケート実施の諸元は表一のとおりである。また、自由表記法による市民の提言を担当者が全て目を通して分類し集計した結果が図一1～5である。

以下、この結果を基に、市民の描く二十一世紀の横浜の街づくりについて若干の考察をするものである。

① 市民は緑を欲している

「自然や緑を保全する」「都市公園や広場、緑地を創造する」といった内容の提言が圧倒的に多く、双方で二七%を越えた。市民の生の提言をいくつか掲げよう。

「自然と身近に接する本当のひろば」を持った街を期待する」

「外国の公園にリスや野鳥がいるように、緑と動物がいる街に」

「日本大通りの落葉を二週間ほど清掃しないでほしい」

六八年の都計法改正に伴う市街化区域・調整区域の線引きは、法改正自体が遅きに失したとはいえ、市域の二五%を調

表一 街づくり展アンケート 実施諸元

質問	「横浜は21世紀への街づくりを進めております。その21世紀は20年後にせまっております。今の子供が大人になるとき、あなたの期待する街の姿はどのようなものでしょうか。あなたのご提案をお聞かせください。」				
1.	アンケート用紙回収数				
	男	1,591人	女	359人	不明 26人 合計 1,976人
2.	「21世紀への街づくり」への提言、回答者数				
	男	1,008人	女	228人	合計 1,236人
3.	提言件数※				
	男	1,375件	女	312件	合計 1,687件

※ 提言はフリーアンサーのため複数回答があり、提言件数として集計した。

図一 「21世紀への街づくり」への提言

男 1,375件 女 312件 合計 1,687件

提言内容	件数				
	50	100	150	200	250
都市施設整備					
都市の再開発による合理的機能的な街	16				
道路を整備し、交通混雑をなくす	28				
地下鉄など公共交通施設の充実	54				
港湾機能の充実	17				
地震や災害に強い安全な街	11				
その他	67				
生活環境整備					
都市公園や広場・緑地の創造	68				
自然や緑の保存	13				
歩道を整備し、安全で楽しい散策や買物	67				
水や空気をきれいに公害のない街	28				
ゴミのない清潔な街	21				
街に彫刻を置くなど都市美観の向上	31				
住みやすい便利な街	27				
上・下水道を整備する	11				
その他	67				
横浜の歴史					
横浜独自のイメージ・地域性を大切に					
歴史を大切に、古い街なみなどの保存	88				
港や川など水際を大切に	34				
その他	103				
市民生活の充実					
心のふれあいのある地域コミュニティを	25				
明るい健康なくらしのできる街	24				
美術館・図書館など文化施設を豊かに	59				
福祉の充実した街	67				
その他	68				

上 件数 下 %

図二 「21世紀への街づくりへの提言 男女別比較

提言内容	男・女計 (1,687)		男 (1,375)		女 (312)	
	件数	%	件数	%	件数	%
都市施設整備						
都市の再開発による合理的機能的な街	16	0.9	14	1.0	2	0.6
道路を整備し、交通混雑をなくす	28	1.7	24	1.7	4	1.3
地下鉄など公共交通施設の充実	54	3.2	46	3.3	8	2.6
港湾機能の充実	17	1.0	14	1.0	3	1.0
地震や災害に強い安全な街	11	0.6	10	0.7	1	0.3
その他	67	4.0	60	4.3	7	2.3
生活環境整備						
都市公園や広場・緑地の創造	68	4.0	59	4.3	9	2.9
自然や緑の保存	13	0.8	11	0.8	2	0.6
歩道を整備し、安全で楽しい散策や買物	67	4.0	54	3.9	13	4.2
水や空気をきれいに公害のない街	28	1.7	20	1.4	8	2.6
ゴミのない清潔な街	21	1.2	15	1.1	6	1.9
街に彫刻を置くなど都市美観の向上	31	1.8	27	2.0	4	1.3
住みやすい便利な街	27	1.6	23	1.7	4	1.3
上・下水道を整備する	11	0.6	10	0.7	1	0.3
その他	67	4.0	54	3.9	13	4.2
横浜の歴史						
横浜独自のイメージ・地域性を大切に	88	5.2	76	5.5	12	3.8
歴史を大切に、古い街なみなどの保存	34	2.0	28	2.0	6	1.9
港や川など水際を大切に	103	6.1	88	6.4	15	4.8
その他	103	6.1	88	6.4	15	4.8
市民生活の充実						
心のふれあいのある地域コミュニティを	25	1.5	20	1.4	5	1.6
明るい健康なくらしのできる街	24	1.4	20	1.4	4	1.3
美術館・図書館など文化施設を豊かに	59	3.5	48	3.5	11	3.5
福祉の充実した街	67	4.0	54	3.9	13	4.2
その他	68	4.0	54	3.9	14	4.5

整区域として残すことが出来たのは自然の保全にとって一応の成果であった。その後も横浜市は緑の保全について各種の施策を打ち出してきているが、市街化区域内の残存緑地は年々減少の一途をた

流行の兆しを見せており、これら景観的緑地の保全は極めて難しい状況にある。一方、都市公園の整備については、市民一人当たり一・八七㎡(昭和五十五年度)と低水準にとどまっている。都市公

園法施行令は、住民一人当たりの都市公園面積の標準を市街地で三㎡、市町村域で六㎡と規定しているが、それらにも程遠い。自治体のシビル・ミニマムにせよ一人六㎡は画餅である。ましてハイパークやセントラルパークのような大都市公園は望むべくもない。一般に巨大都市には、児童公園や近隣公園規模のオープンスペースとは質の異なる大規模緑地が

どっている。最近では斜面緑地を利用した新形式の住宅開発が

園法施行令は、住民一人当たりの都市公園面積の標準を市街地で三㎡、市町村域で六㎡と規定しているが、それらにも程遠い。自治体のシビル・ミニマムにせよ一人六㎡は画餅である。ましてハイパークやセントラルパークのような大都市公園は望むべくもない。一般に巨大都市には、児童公園や近隣公園規模のオープンスペースとは質の異なる大規模緑地が

必要であると言われる。モスクワ市は一九七一年に、都市の再編成による、大規模緑化事業を含む総合計画を採択したが、このような公園緑地の大プロジェクトを、市の「緑のマスタープラン」の中に盛り込む必要がなからうか。さらにここで付け加えておきたいのは、住民一人当たりの面積標準や誘致距離基準といった発想を基にした、お定まりの設置基準についてである。区画整理地の中に造られた「一人六㎡」の公園の何という陳腐さ！この点、ニューヨークのベスト・ポケット・パーク(チョッキのポケット)にも入れることのできるほど小さな公園の意。写真と図一(6)には学ぶべきことが多い。どんな小さな公園にも「設計基準」を超えた設計思想が必要であり、そこにこそ市民の真に要求するスペースが生まれるものと確信する。

大通り公園は、当初都市計画決定を前提とせずに設計された都市公園であり、従来にならぬ雰囲気を作り出すことに成功したが、管理面の問題から設計内容が後退したと聞く。公共施設の管理責任問題については種々議論のあるところであり、ここでは紙面を割く余裕もないが現状では施設管理者(自治体)側が弱腰にならざるを得ないようである。しかし「水の広場」で水遊びをしてはいけないとは、何と気の毒な子どもたちだろう。

図-3 「21世紀への街づくり」への提言 年令別比較(男)

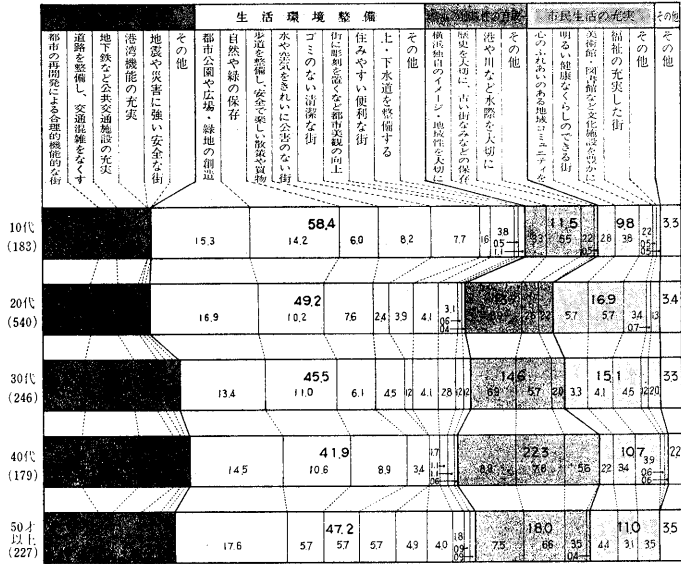


図-4 「21世紀への街づくり」への提言 年令別比較(女)

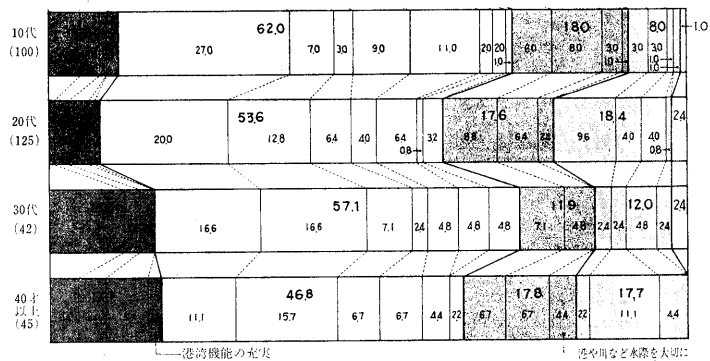
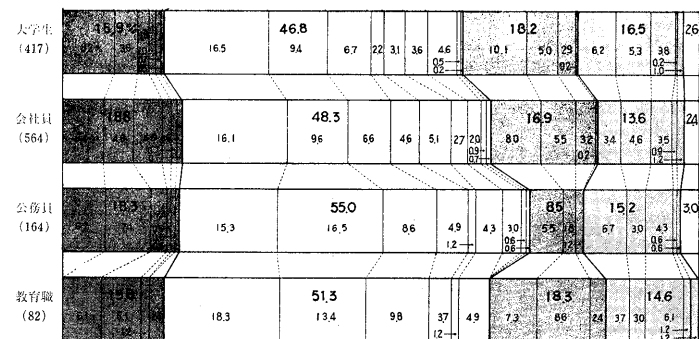


図-5 「21世紀への街づくり」への提言 職業別比較



また、都市の中の広場空間については、横浜市街地環境設計制度の運用による山下公園前のペアー広場をはじめ、各区の再開発指導による敷地内空地の広場化が、都市デザインの一手法として定着化しつつある。今後はこういった手法が全建築物に及んで、都市と建築が一体となって地区形成を図れるようにしたいものである。さらにこれからの広場空間には、自然に人が集まるような演出(たと

えばバリのカフェテラスの真似でも良い)も望みたい。

都市の緑の保全や創造は一朝一夕に出るものではない。緑地保存事業等への市民の理解を高めてもらうと共に行政側も真に「創造」の名にふさわしいオープンスペースの創出に心がけるべきである。

②「市民にとって「ヨコハマ」とは何か
「横浜独自のイメージ、地域性を大切

にする」という提言が、緑の保存・創造に次いで二位(七・五%)を占めた。

生声を掲げると、「ここが横浜だ。ここに来れば横浜にいると思える雰囲気のある町」「東京のまねだけはして欲しくない」「今までの横浜のイメージをこわさないような街づくりを期待します」

この提言は、男女や年齢差はほとんど関係なく平均化しており、職業別で「大

……文明開化……、……居留地……、……海……、……港……、……開港……、……異人館……、……山手……、……元町

写真 N. Y. グリーンエーカーパーク

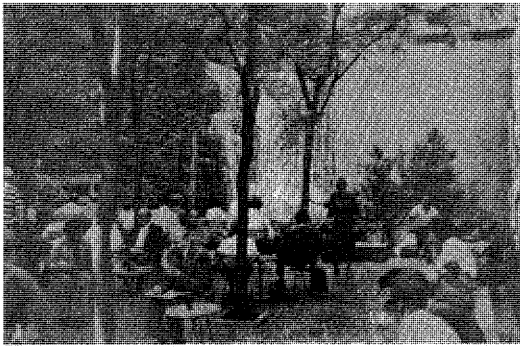
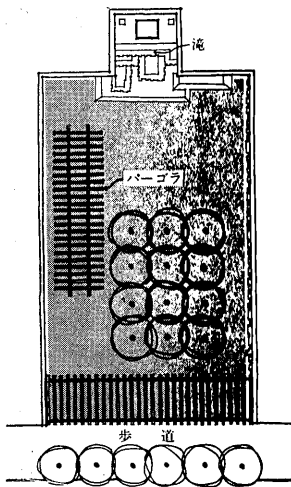


図-6 グリーンエーカーパーク平面図



……、……中華街……、……伊勢佐木町……、……馬車道……

一般に、大都市の住民ほど、街の中のちょっとした特徴や他との相違に敏感であるという。確かに現代の巨大都市は、視覚的に、あるいは人間の全官能に、訴える力を持たない。薄っぺらなファサードの事務所ビル群や、どこに行っても同じ住宅地の広がりや、人間が本能的に希求するアイデンティティといったものと無縁である。

東京の原宿や六本木、渋谷公園通りに若者が集まるのも、こうした背景を考えると納得できる。彼らが発見したのは、ほんのちょっとした店のデザインセン

ス、洒落たブティック、木の間越しに眺められる大使館や金髪碧眼のマドモアゼルなのである。上田篤の言う「ファッショントウン」(上田篤編「都市の文化行政」)は、こうして自らの性格を方向づけ、有能な商業デザイナーを用いて、市民に「はれ」の場を提供し続けようとしている。

こうした傾向が、主としてアンノン族や商業主義に支えられている事実は否めない。しかし、現代都市はこの他に誇れる街並みを持ってはいようか。

さて、翻ってわがヨコハマに目を向けてみよう。ある都市のもつイメージは、各個人で違って当然ではあるが、横浜の場合、大多数の人のイメージが港開港—文明開化に帰することは論をまたないであろう。開港や外国文化の輸入はひとつの歴史であるが、それは現代に直接結びつく—たかだか一二〇年の—経験であ

り、人々が極めてイメージしやすいものである。こういった市民の持つイメージ志向性の強い都市は、自らのアイデンティティを發揮する上で極めて有利である。逆に言えば、都市は自らのイメージのネタをいつまでも残したり、発展継承していかなければならない。

街並みとしてヨコハマのイメージを代表するのは、中華街・元町・馬車道・伊勢佐木町・山手界隈・山下公園周辺……といったところだろうか。これら各地区では、レンガ(タイル)やガス燈・馬車・異人館・横文字といったイメージの増幅を図っている。伊勢佐木町は、インタナショナルな手法であるモルル化事業によりイメージを一新させたが、これはこれで新しい横浜の顔となっていくのであろう。

一方、こうした努力にもかかわらず、街並みが平均化していく傾向も見受けられる。レンガタイルの手法や商店街のモルル化事業は、今や日本中の都市に拡大する勢いであるし、また逆に中華街の店が洗練されすぎたり、元町に東京のブティックが進出したりする。こういった傾向は、ある程度やむを得ないものではある

が、地元の商業者は自らの街並みのあり方をもっと真剣に考えるべきであろう。行政側も都市美観調査(昭和五十四・五十五年度都市整備局)等により横浜独自の街並み保全・創造の手法を模索し始めている。

横浜の地域性重視を主張する市民の提案は、同時に、東京を中心とする首都圏の中での横浜の機能的自立をも主張している。国レベルの中核管理機能が集積した東京に隣接するという地理的条件は、横浜の都市構造を著しく跛行させてきた最大の原因である。この点については、従来、都心部強化事業・金沢地先理立事業その他のプロジェクトにより、自治体として最大限の改善努力が払われてきたことを指摘するに止めたい。

③—再開発・区画整理等の推進

「都市の再開発や区画整理を推進して、合理的・機能的な街づくりを行う」という提言が第三位(六・八%)を占めた。性別では男性に多いこと。また職業別で教育職に意見が見られないのが特徴的である。

生の声を掲げる。

- 「高層ビルの中にも、スッキリと整頓された商店街とゆたかな緑、また芸術のある広場がほしい」
- 「海の玄関としてふさわしい横浜駅

表一 2 横浜市の再開発の体系表

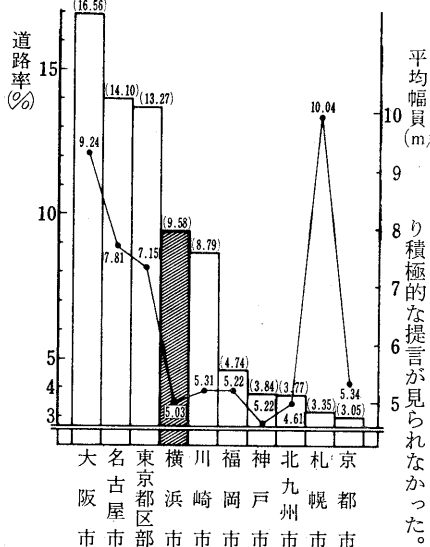
地区名	マスタープラン等		街づくりの手法							
	マスタープラン	ルール(等)網羅	市街地再開発等							
			市街地再開発専業	市街地改修専業	区画整理専業	土地区画整理専業	大規模公共施設整備専業	駅前整備	遊歩帯	その他
1 横浜駅東口・神町	○						○	○		
2 横浜駅西口周辺	○		○	○			○	○	○	○
3 野毛周辺	○		○	○						○
4 大通り公園周辺	○							○	○	○
5 関内駅前防犯建築街区	○	○	○						○	○
6 馬車道周辺	○	○						○	○	○
7 伊勢佐木町1~7丁目	○	○	○							○
8 山下公園周辺	○							○	○	○
9 石川町・南門通り周辺	○	○	○						○	○
10 保土ヶ谷駅西口	○		○						○	○
11 豊川天主堂周辺	○								○	○
12 岡野平沼町周辺	○								○	○
13 新本牧地区	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
14 鶴見駅周辺	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
15 新横浜駅北側	○								○	○
16 戸塚駅周辺	○		○	○					○	○
17 上大岡駅周辺	○								○	○
18 港北センター	○								○	○
19 十日市場駅周辺	○								○	○
20 二俣川駅周辺	○		○	○					○	○
21 金沢文庫駅周辺	○		○	○					○	○
22 東戸塚駅周辺	○								○	○
23 綱島駅周辺	○	○	○	○					○	○
24 中山駅周辺	○								○	○
25 鶴ヶ島駅周辺	○								○	○
26 ミツヅク駅周辺	○								○	○

東口の開発の早期整備と港湾の改良を
 本項目に分類された提言から、市民が本当に望む都市開発のあり方は、合理性追求とベアになった都市環境改善であることがはっきりした。「高層ビルと公園緑地」「東口開発と港湾整備」といった具合である。
 本市の再開発の体系と地区ごとの手法を整理したのが表一2である。都市再開発法による市街地再開発事業だけでなく、伊勢佐木町に見られるモルル化事業先行手法、馬車道や綱島における地元組織主導の誘導手法、山下公園周辺の行政主導の建築指導手法等、横浜市の再開発行政は地区の実状に対応した、多様な展

開を示し始めている。
 さて、ここでその他の都市施設整備関連の提言について、若干触れておきたい。
 ・「道路を整備し、交通混雑をなくす」
 ・「道路を整備し、交通混雑をなくす」
 ・「地下鉄など公共的交通施設を充実させる」
 ・「地震や災害に強い安全な街にする」
 ・「港湾機能を充実させる」
 ・「道路整備については、三〇〜四〇歳の男性に特に多く見られた。横浜市の道路率は九・六％といまだ低水準であると共率に、近年の自動車保有台数の急激な伸長により、市内の道路は慢性的に渋滞して

いる。もっとも、クルマと道路の関係はイタチごっこのそれであり、単なる道路整備事業だけでは解決しえない。今後の道路整備は、鉄道との平面交差等のネックの解消を最優先にすべきと思うがいかがだろうか。
 地下鉄やバス路線等の公共交通機関の整備やサーブिस向上(一定区間内乗換自由システム等)が、人々にマイカーを捨てさせ、ひいては自らの経営基盤

図一 7 道路率・幅員比較



注 昭和54年4月1日、大都市比較統計調査

を向上させている例が世界各都市から報告されている。特にバスのサーブिस向上については、接近表示板だけでなく根本的な改善が考えられてよい。
 都市防災や港湾機能については、あま

については、むしろ市民のレクリエーションの場として把える意見（「港や川など、水際を大切に」二・八%）が多かった。

都市施設整備関連の提言は、計一七・七%に及んでいるが、特に三〇代以降の壮年層にこの種の提言が多かったのが特徴的である。

④ 安全で楽しく歩ける街にする

「歩道を整備し、安全で楽しく買物や散歩のできる街にする」六・七%、第四位

生の声を掲げよう。

「古い街並みを保存しつつ、人間優先の道路環境の徹底した街づくり、川や水面に近づける街づくり」

「子どもが安心して通学でき、遊ぶように環境の整備された街づくり」

「ヨーロッパの古い街のように、人間が落ち着いて歩けるような街」

「大通り公園やイセザキモールのような快適で安全な街づくり」

「道路にうるおいを与えてほしい。イセザキモールのように」

「歩道がゆったりして並木が美しくどこに出てもさわやかな散歩コースが欲しい」

主として車道整備を意図した提言（四

・六%）よりも歩道整備に関する提言が多いのは、それが「街づくり展」のメインテーマの一つであったからでもあるが、今、市民の目は確実に人間最優先の道路行政へと向きつつある。

イセザキモールは、道路法上の歩行者専用道路とはなれなかったが、車道の進入禁止という智慧で実質的な歩道を獲得した。都心部の再開発とリンクした歩行者モールの設置は、今やインターナショナルな手法として世界の各都市で実現されている。さらに最近では、人と車の安全な共存を目指してオランダのデルフト市で実験された「ボンネルフ」といったシステムも考えられているが、歩道道化のような明快性は得られていないようである。

また、ヨーロッパ各都市では、こうした歩行者モールと交通セルを組み合わせて、さらに完璧な歩車分離システムを実施している例も見受けられる。イセザキモールと大通り公園には含まれた区域の歩道道化なども、これらのシステムの応用によって可能となるのである。

これからの既成市街地における道路整備上の主課題は、まさに歩行者道路の確保にあると思われるが、いかがだろうか。

⑤ 歴史ある街並みの保全

「歴史を大切にし、古い街並みなどを

保全する」五・二% 五位

本提言については、女性の方が積極的であった。職業別では公務員が極端に少なく、逆に教育職の提言が目立った。

生の声を掲げよう。

「昔の異国的風景の中に、最新のデザイン建築物が立ち並ぶ美しい街」

「明治村に勝る開港文化村をつくる」

「近代日本の開国の歴史を自慢できる遊園地がほしい」

「横浜の歴史」や「古い街並み」は、先に掲げた横浜の独自性を表現する内容でもあるわけだが、ここではあえて別にとり上げた。

近年、全国的に歴史的な街並みの再評価、保全の問題が取り沙汰されている。小樽運河保存問題が新聞で大々的に報じられたのはつい最近のことである。一方で、京都や飛騨高山、妻籠といった歴史的町並みは、四季折々の女性ファッション誌をにぎわしている。神戸の異人館通りは若者で一杯である。

こうした現象が、現代の無味乾燥な都市空間に対するアンチテーゼであることは説明するまでもなからう。では、わがヨコハマでの状況はどうか？ 都市としての歴史が浅く、かつ震災・戦災と二度にわたるアクシデントに見舞われた横浜

市には見るに足る「歴史的街並み」など存在しないという説もあるが、都市整備局で実施中の都市美観調査の中から、山手周辺と関内周辺の例（図―8・9）をとりあげてみよう。

山手の外人墓地周辺は、やはりファッション化された若者の散歩道となっている。この界限には古い洋館も少なくないが、神戸ほどの集積はないようである。

この一帯は風致地区であり、「山手地区景観風致保全要綱」により開発行為・建築行為は一定の規制を受けるが、建物の取り壊しは自由である。

一方、関内地区は、事務所ビルや旧銀行ビル、倉庫等に古い建造物が多く、ファッションビルではないが、本町通りや海岸通り、日本大通りを中心かなりの集積のあることがわかる。これらは明治末（昭和初期）に建てられた近代建築であるが、旧横浜正金銀行（妻木頼黄設計）、新港埠頭赤レンガ倉庫（大蔵省臨時建築部）、三井物産ビル（遠藤謙一日本最初の本格的RC造事務所ビル）等の明治建築を筆頭に、各々が横浜の風土に培われてきたものばかりである。

最近刊行された「日本近代建築総覧」（日本建築学会編）は膨大な調査に基づく現存する明治（昭和戦前までの日本近代建築の総リストであり、全国で約一五万五千件が収録されているが、これによる

と、神奈川県だけで三二五件、うち山手
 周辺で四六件、関内周辺で一二五件とな
 っている。しかしながら当調査以降に取
 り壊された建物も多く、現時点では山手
 で四三件、関内一一〇件となっている。

山手や関内の歴史的な建造物群は、確
 かに周辺の街並みに特色を与え、独自の
 雰囲気形成していると思える。ではこ
 れらの保存問題をどう考えたら良いだろ
 うか。

単体として極めて優れた建築物には、
 新しい用途を与えることにより、現在に
 蘇らせることができる(旧正金銀行↓県
 立博物館のように)が、少数のそれらを
 除くと、あとは今のところ何の手当も出
 来ない。現に本町通りの住友銀行をはじ
 めいくつかの優れた様式建築が既に姿を
 消し始めている。これら凍結保存が意味
 をなさない建築物については、開発を前
 提とした保全手法が考えられねばならな
 いし、また街並み全体を問題にする以上
 は、地区指定等の面的ないし線的な担保
 手法を前提にしなければならぬ。

街並み保存について先進的なくつか
 の自治体では、「都市景観条例」といっ
 た中に、都計法上の美観地区や文化保護
 法上の伝統的建造物群保存地区を位置づ
 けて運用し成功している例もある。

いずれにせよ、街並み保存の問題は最
 も今日的であると共に、ある意味で緊急

を要する課題でもあ
 る。行政も早急に対
 応せねばならない
 が、また市民の側か
 らの運動の盛り上が
 りにも期待したい。

⑥—全体を通して

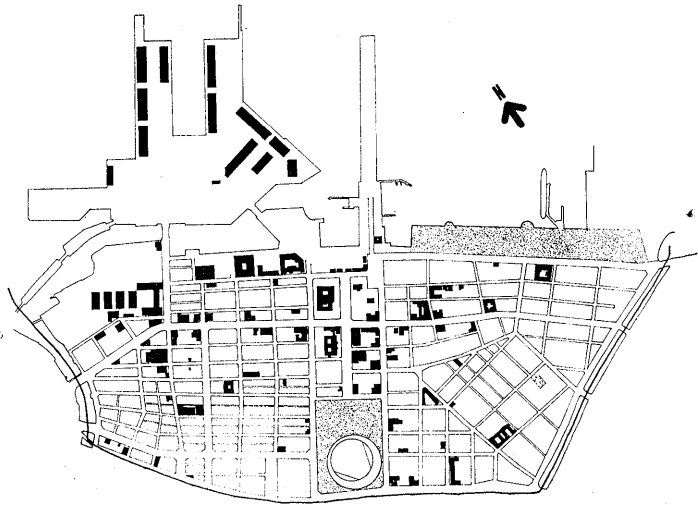
全体に、市民の提
 案する「二十一世紀
 のヨコハマ」像には
 夢物語は極めて少な
 かった。むしろ生活
 環境整備や生活の充
 実といった、現在の
 街づくりの施策の延
 長上にある提言が多
 かったように思う。

生活環境整備に関
 連する提言として

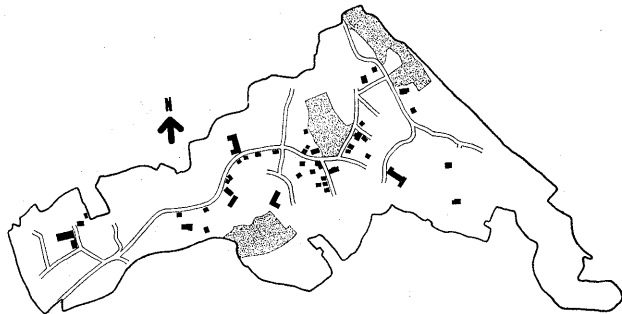
は、緑の保全や創造(二七・二%)、歩
 道の整備(六・七%)、無公害都市(四
 ・五%)、ゴミのない清潔な街(四・二
 %)、都市美観の向上(三・一%)等が
 上位を占めた。

また、市民生活の充実に関連して、心
 のふれ合いのある地域形成(四・四%)、
 明るい健康な暮らしのできる街(四・四
 %)、文化施設の充実(三・五%)とい
 った提言が見られた。

図一 8 関内地区周辺の歴史的建造物(明治・大正・昭和の初期)



図一 9 山手地区周辺の歴史的建造物



意見は十分尊重に値するものと考え
 最後になったが、本アンケートの集計
 は本市電算機室の統計用汎用プログラ
 ムによった。担当のスタッフの方々に感謝
 したい。

△石毛〓都市整備局開発課
 計画係、小松崎〓同指導係

三 おわりに

「街づくり展」は、市民に対する行政
 の問題提起の場であった。したがって、
 この展に付随したアンケート調査の標本
 は、社会調査一般の無作為抽出標本とは
 異った性格を有する。しかし少なくとも
 彼等は都市問題に関心をもち、自ら進ん
 で提言を書いてくれた市民であり、その